釧路空襲の前後

小林　一之介

戦後五十年。あっと言う間というか、もうというか・・・。しかし今でもあの空襲は目に浮かぶ。しかも戦争があと一ケ月で終わるというその直前だ。

七月十四日は恒例の弁天さんの祭りで小屋も並んでいたが、陽が昇ると同時にキューンという空気を切り裂く様な爆音と、ドドーン、ダダーン、バリバリという銃音が轟き、朝焼けの空に数機のアメリカ戦闘機が乱れ飛んでいた。

「空襲だあー」「クウシュウー」「退避」「タイヒー」という声が飛び交い、サイレンがけたたましい音で鳴り響いた。

私も戦地に五年間いたし、負傷して帰還してから二年目の事ことだった。

爆弾を落とされ瞬時に火災が発生して、炎と煙の中を人の群れが動いていった。今の幣舞橋の南の丘陵地帯は、防空壕の穴だらけだった。この空襲で駅から幣舞橋までの中心街は焼け野原になった。旭小学校はその頃第四小学校と言っていたが、それがいつまでもくすぶっていた。その惨状は「阪神大震災」の跡そのままの状態であった。この空襲で亡くなった約二百名の人は、防空壕という穴の中にいて焼け死んだものが多かった。

次にまた空襲があるというので、今の釧網線の鉄橋を渡って遠矢別保方面の山中に逃げるべく、荷物を肩に歩きはじめたのもこの頃だった。

当時はあらゆる物資が配給で切符制だった。米はなく煙草は一日五本で、切符がいらないのは空気と水だけであった。

まさに「明日が消えていた」時代。そして終戦・・・。

その後の数年間は、「生きる」ために息を切らしていた。ようやく列車が動き工場が始動したが、働いても給料はなく、貰えるのは芋か南瓜か澱粉であった。食糧配給と言えば澱粉粕であり、それを水につけて上ずみを流して団子にした。上ずみには藁や馬糞が混じっていることもあった。私たちは米を求めて買い出しをはじめたが、貴重品で

あった石鹸や衣類を持って農村をまわっても芋か南瓜であり、それすらなかなか手に入らない状況であった。買い出し列車に乗ることも容易でなかった。

「戦争」の行き着くところはこうしたものだろうと、負傷した腕をなでさすったものだ。しかも、戦地で衛生兵であった私は、どのくらい戦友達の死体を地に埋めたことか。私の弟も南方で戦死していた。

今日の平和は、この惨状と犠牲の上に築かれてきたものだ。

この平和を更に強固なものにするためにはどうするか。

戦後五十年の更なる意味を考えさせられる。